

平成 28 年 5 月 18 日

浜田市議会議長 西田 清久 様

議員名

布施 賢司



## 調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

### 記

1. 期 間 平成 28 年 4 月 2 日 (土) ～4 月 3 日 (日)

2. 視察先及び研修テーマ

三重県 松阪市

- ①「駅鈴が結ぶ浜田市と松阪市との観光・文化交流協定」の協定書調印式に参加。
- ②北海道の名前を考案した探検家、松浦武四郎氏（松坂藩）の記念館を訪問し、浜田との関係を調査する。
- ③松阪三大豪商といわれる、三井家、小津家、長谷川家の中で旧長谷川邸を公開日に合わせて調査する。

3. 参加者 牛尾 博美 野藤 薫 串崎 利行 布施 賢司

4. 調査経費 ¥35,590 円

5. 調査内容

- ① 浜田藩初代藩主 古田重治公は、1619 年松坂藩から転封となり、浜田城や城下町を整備しました。また、第 12 代藩主 松平康定公が伊勢神宮参拝の折、松阪の国学者本居宣長に源氏物語聴講のお礼として贈った駅鈴が、松阪市のシンボルとして今も広く受け継がれているなど松阪市とは歴史的な深いご縁がある。平成 23 年 9 月、「浜田市観光ボランティアガイドの会」が浜田藩の歴史を学ぶために松阪市を訪問されたことで、この両市の歴史的なご縁を知るきっかけとなり、以降、市民発起による「友好交流の会」がそれぞれ設立され交流が広がっています。そこでこのご縁を契機として



人口の増加を図るとともに、両市の観光・文化の振興と地域経済の発展に寄与することを目的として、両市間の交流協定が締結されます。これまで議会は委員会視察や会派視察等を通じ、「歴史的な縁」を大切にしたい都市間交流協定を早く結ぶべきだと提唱してきました。時間がかかりましたが、この度やっと平成28年4月2日（土）三重県松阪市のクラギ文化ホールで「宣長まつり」の関連イベントとして実施される石見神楽上演（上府神楽社中18名）にあわせ、浜田市からの行政関係者数名（観光交流課）、浜田市\*松阪市友好の会一行（斎藤会長と17名）、浜田市議会5名が参加し、浜田市議会議長（西田議長）と松阪市議会議長（大平議長）が見届け人となり、記念すべき両市長（久保田浜田市長、竹上松阪市長）による協定書調印式や記念セレモニーが執り行われました。この協定は今後「駅鈴協定」として呼ばれます。

調印式終了後に、両市の「友好の会」より松阪木綿の糸（縦糸）と石州半紙の糸（横糸）を紡いだタペストリー（川平正男氏製作）を記念品として両市に贈呈されました。また、上府神楽社中による「恵比寿」の上演に合わせて、タイ釣りの代わりに、「祝・駅鈴協定締結記念」のノボリを釣って頂き、両市長と関係者、会場の松阪市民全員で万歳三唱して祝いました。



（記念セレモニーで関係者や両市議会議長が見届け中、調印される両市長）



（両市友の会、会長より記念品贈呈）



（恵比寿が釣り上げた、駅鈴協定締結記念のノボリ）

第12代藩主 松平康定公は隠岐に伝わる駅鈴（日本に現存する駅鈴は2つだけでいずれも隠岐の島町の玉若酢命神社に保存）のレプリカを作らせて贈っているため、隠岐の島町の関係者2名（吉田隆氏、宮原竜二氏）も参加して頂きました。また、浜田市観光PR大使 山崎ていじ氏も駆けつけて祝って頂きました。

\* 駅鈴：奈良時代に始まった駅伝制で使用された鈴。当時の役人の身分証明書のようなものである。

② 三重県が生んだ偉人 松浦武四郎（1818～1888）は幕末から明治維新に活躍し、生涯にわたり全国を歩き続け、旅行家・探検家、作家、出版者、学者・・・たぐいまれなる知識欲と冒険心で、多芸多才ぶりを発揮したが、数々の業績の中で人々の記憶に刻み込まれてきたのは、「北海道の名付け親」である事で知られている。今でこそ「北海道」と書くが、武四郎が最初にアイヌ語の地名に基づいて提案したのが「北加伊道」であった。明治政府により、「加伊」を「海」に修正して「北海道」になったと説明があり、記念館入口の床部分には、実際、武四郎が計測して描いた絵図が、説明板にもなっていた。北海道には松浦武四郎の記念碑は道全体に55もあり、「道を歩き 道をつくった」功績を讃えています。

また、生涯にわたって諸国を遊歴しており、各地の様子や名所・旧跡の様子を、スケッチを添えてメモしながら歩いていました。浜田城下を通過した記録が「壬午遊紀」に残されている。その記の一部を紹介します。（イラストを入れた日記と言える）

\*一部を紹介

「是松平周防守のご城下成。町に小川一すじ有。町並み十丁斗、凡七八百軒も有。～中教院に到りて、藤井宗雄を訪ふ。不在して宅に有るよしなれば、それに到りて逢ふ。最早七十歳斗なるが、平田風の国学をして土地のことは頗る力を極めし人也。」

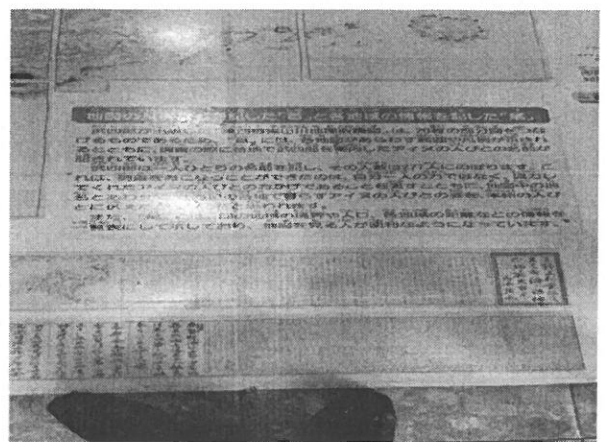


『濱田の城下に入り、国学者 藤井宗雄氏（神楽の台本を整理し、現在の八調子神楽隆盛の基礎をつくる）を館に訪ねたが、留守で、しばらく待ったが逢えなかった。大変残念である』

松浦武四郎は、寛永7年（1854）に竹島雑誌を著しているが、竹島と言えば、会津屋八衛門（浜田藩廻船問屋）。竹島事件で八衛門は天保7年12月（1836）斬罪された。山陰地方の石見路を旅していた武四郎は、竹島周辺の事を詳しく知っている八衛門に会えなかった。（天保7年6月、逮捕され尋問されていた）このことを知る限り、武四郎は浜田との縁は「会いたい人に逢えなかった」実らぬ縁であったと推測しました。



（松浦武四郎記念館にて）



（記念館入口、床の部分に絵図や説明板）

③ 松阪三大豪商といわれた長谷川家は、平成25年4月に旧邸を松阪市に寄贈されました。他の名家とは比較にならないほど保存状態が良く、古文書が多く残されているのが最大の特徴であり、その価値をより多くの市民や来訪者に知って頂くために、毎週日曜日と祝日にフリー公開されています。団体公開は毎週月曜日と金曜日に公開され、それぞれの建物にガイド(説明員)の方がおられ、監視と解説をしておられます。視察での私たちの対応は、市役所のOBの方で、短時間でありましたが親切丁寧に対応して頂きました。

邸宅は、江戸時代の木綿問屋「丹波屋」。格子、霧よけ、妻入りの蔵など5つあり、建物に使用されている建材は職人さんがいなくて、もう入手できないものもあると言う事でした。そして、うだつの上上がった屋根など落ち着いたたたずまいの中に、当時の松阪商人の隆盛ぶりがうかがえる大きな屋敷で、その当時の当主が集めたであろう大判・小判や古銭が近年になって見つかり、一つの蔵で展示されていました。



(市役所近くにある、魚町通りにある旧長谷川邸)



(蔵の中で展示されている、大判・小判や古銭)

### 視察感想

松阪市との駅鈴協定を締結できたのは、本当に嬉しく思います。やっと願いが叶った瞬間に立ち会うことができ、あきらめずに同僚議員と声を出し続けてきたところが、報われた瞬間でもありました。会場全員で万歳三唱したときは、涙腺がゆるみました。協定は結ばれましたが、これで終わりではなく始まりです。協定に定める交流事業を形にして、お互い相乗効果を生み出して欲しいものだと思います。(第一弾として、ふるさと寄附で、浜田市「のどぐろ」、松阪市の「松阪牛」の返礼品の最強コラボ実現)

松浦武四郎は、歩いた実測により地図を描き、初めて政府で刊行した地図が武四郎作と聞いて感心したのと、何が彼を突き動かしたのか興味が湧いてきて、武四郎について研究したくなりました。

旧長谷川邸を寄贈された松阪市は、その活かす方法が定まるまで寄贈は受けないと、当時の市長が決断するぐらいの、大規模な松阪商人の旧家でした。あまり、時間がなく質問ができなかったが、次回訪問時にはゆっくりその説明を聞きたいと思った。最後に松浦武四郎記念館や旧長谷川邸、本居宣長記念館など市内を視察し、松阪市を離れるまで同行して頂いた「松阪市ボランティアガイドの会」西村様、ありがとうございました。